

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：34503

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2015

課題番号：24320161

研究課題名(和文)五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究

研究課題名(英文)Archaeological Study of the History and Myth of Wu Du Mi Dao

## 研究代表者

森下 章司 (Morishita, Shoji)

大手前大学・総合文化学部・教授

研究者番号：00210162

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 6,600,000円

研究成果の概要(和文)：後漢代の四川で勃興した五斗米道は、後に道教の源流ともなり、中国宗教史・歴史において重要な意義をもつ。文献史料だけでは不明な点が多いが、本研究では四川を中心とした実地調査をもとに、五斗米道の動向との関連性を想定した華西系鏡群や図像資料など考古資料からのアプローチを試みた。

その結果、華西系鏡群生産のさらに詳細な動向、その信仰背景を示す新資料、図像に表現された神格の意義を明らかにし、さらに五斗米道とのつながりを確認した。それらの銅鏡や図像が山東や江南など他地域にも影響を与え、また深い交流関係を有する。こうしたつながりは、同じく道教の祖となる太平道と関係する可能性をもつ。

研究成果の概要(英文)：Wudumi Dao which emerged at the Sichuan province in Late Han period is the origin of Taoism, so it is very important for the study of the history of Taoism and Chinese religion. Though the documents about Wudumi Dao is not sufficient so I researched the archaeological materials of Sichuan Province in late Han period. Through the study of the Han Mirrors made in Sichuan and Xiangxi province and the iconography of the tomb ornament, I found out the relationship between those mirrors and the history of Wudumi Dao. I made it clear the religious influence of Han period Sichuan province for the other areas. It shows the connection between Wudumi Dao and the Taiping Dao in east area of China.

研究分野：考古学

キーワード：考古学 後漢代四川 銅鏡 五斗米道 図像解釈 太平道

## 1. 研究開始当初の背景

後漢末に四川で成立した五斗米道は、太平道と並び、はじめて教団組織を形成した宗教運動として、中国宗教史や道教史において重要な意義を有する。ただし、近接する時代に記された文献史料は『後漢書』、『三國志』などに限られ、その動向や具体的な内容については不明な点が多い。

史料として問題となるのは、『道藏』に収録された道教経典の扱いである。張陵の傳承など五斗米道についての記述を有する経典は数多くあるが、後世の編集や仮託を多く含むとみるのが当然である。その記述によって直接に歴史的過程・信仰内容の解釈をおこなうことはむずかしい。また史書の記事についても、史料間で整合しない記述の多々あることが、これまでの研究において指摘されている。文献史料のみからの検討には限界がある。

研究代表者は、華西系鏡群と名付けた後漢末の鏡群に対する考古学的な分析と銘文・圖像解釋から、それらが五斗米道と強く関連するものと考えた(森下 2011b「三段式神仙鏡の新解釈」、森下 2012「華西系鏡群と五斗米道」)。その圖像や銘文内容は、道教経典に登場する神格や傳説と結びつけることができる。これを突破口とし、さらに銅鏡系統の展開や関連する考古資料の動向に関する検討を深め、それらを史書や道教経典と比較することにより、五斗米道の歴史的展開や信仰内容の解明に踏み込むことができるものと考えた。

## 2. 研究の目的

文献史料だけでは実態不明の部分が多い。これに対し、五斗米道と強く関連する銅鏡をはじめとした考古資料の研究結果を活用し、その歴史的展開や信仰の実態に関する新研究を確立することが本研究の目的である。研究代表者は、四川・陝西地域に展開した後漢鏡の一群(華西系鏡群)の圖像・銘文内容の解釋から、五斗米道の展開や信仰と強いつながりをもつことを明らかにした。その成果をもとに、鎮墓瓶などこの地域の信仰に関連する考古資料を検討し、地域や年代を確実におさえることのできる考古学的方法の強みを生かして、この宗教の成立と背景・展開過程を精密に跡付ける。さらに圖像・銘文から信仰内容を研究し、道教史の中での五斗米道の新たな位置づけをおこなう。

## 3. 研究の方法

実物資料の検討や出土遺跡・道教資料の調査を中心に、次のような研究方法の柱を設定する。華西系鏡群を中心とした関連鏡群・揺銭樹・鎮墓瓶などの年代・地域の検討、四川・陝西地域における後漢代信仰資料の考古学的検討と五斗米道の展開過程研究、銘文・圖像を通じた考古資料と史書・道教経典の対比、信仰内容からみた五斗米道の系

譜・位置づけを進める。

分類・編年など基本的な考古学の分析を徹底的におこない、各資料の時間・地理的な検討を通して、五斗米道の地域的展開を明らかにする。関連する圖像・造形・銘文資料を広く収集し、漢末の信仰変化の中で各資料の背後にある信仰・世界観を復元し、それらと比較することにより、五斗米道の信仰内容の宗教史上における位置づけや評価を、多角的な面から明らかにしてゆく。

## 4. 研究成果

**概要** 本研究を通じて、以下の点を新たに解明した。

・四川の華西系鏡群・廣漢系鏡群から、他の系統の鏡群への影響関係の強さ。各地域で生産された後漢鏡の系統において四川の鏡群が果たした重要性。

・四川で誕生した圖像の特色(西王母の龍虎座表現、伯牙、黄帝・玄女)の意義。

・上の検討から、四川の二大鏡群の圖像が融合・改変され、画紋帯同向式神獸鏡・画紋帯対置式神獸鏡などが徐州・江南の地で盛行するという変遷過程を確認。

・四川の圖像表現と山東の画像石圖像との間に強い共通性があり、交流関係を想定。

・銅鏡系統や圖像の展開と信仰の広がりとの関係を想定。

・四川で誕生した五斗米道やそのほかの地域信仰が他地域へ傳播、その後の道教へとつながるといふ認識。

### (1) 五斗米道の成立

**初期の活動** 『三國志』や『後漢書』では張陵について、蜀の地で道書を造作したこと、五斗米道の名の由来について触れるのみで詳しい記述はない。組織・制度・教法や張魯の政治的な活動に関する記事が大半を占める。さらに張脩に関する記事の混乱があり、三張の血縁系譜を疑う論もある。張陵に対しては始祖として、早い段階からさまざまな傳説が付加されており、史実の見極めかむずかしい。

華西系鏡群の研究結果は、この問題に関してひとつの検討材料を提供した。鏡群と五斗米道とのつながりが確かであるなら、鏡群が成立した2世紀中葉には、五斗米道と関わる活動が蜀の地に確かに存在したことになる。鏡群の初期の中心地域は成都周辺にあり、張陵の活動地と一致する。その後、2世紀後葉、張魯が漢中地域に本拠を置いた頃、華西系鏡群の分布は陝西地域に移動する。一方でこの段階の鏡群は、漢中政權の直接の勢力範囲外であった蜀の地では出土例がほとんどない。こうした変換状況も五斗米道の動向と年代・地域が共通する。

三段式神仙鏡の成立は新たな世界観を銅鏡圖像に盛り込んだものであり、後漢鏡の展開の中でも画期的な意義を有する。単に新し

い種類の鏡が登場したというだけでなく、新たな信仰の発生を反映している可能性は高い。すくなくとも2世紀中葉の蜀地域において、銅鏡に新たな図像世界を投影する、信仰活動があったことは推測できる。

**四川の環境と社会** 五斗米道のような新たな運動が発生した背景として、四川の歴史・地域的環境を考慮する必要がある。

文献研究では非漢民族が多数雑居する地であることが注目されてきた。チベット、ミャンマー、ベトナムなど周辺地域への交通の要衝地であり、異文化の要素が流入しやすい地でもあった。ここで想定した斗母・北天の星々に対する信仰は、あるいはそうした非漢民族からの影響も考慮する必要があると考えている。

考古学からは地域的特徴の強さが注目される。四川地域には古くから地域性の強い様式をもった器物や墓制が存在する。後漢代には崖墓という在地性の強い墓葬形式が流行するほか、揺銭樹など、四川を中心とした各種独特の器物が確認できる。

さらに地域社会の経済的成熟性にも注目できる。2世紀後半の四川は、墳墓やその副葬品がもっとも発展した時期であった。多数の崖墓が営まれたのは、民間の富裕層および中・下層の発展と関連づけられる。五斗米道の信仰が浸透したのは、そうした中下層のひとびとが中心であったと考えられる。

史書からみれば、この時期の四川は政治的混乱にあり、樊敏碑の銘文などから社会不安の高まりが印象づけられる。五斗米道のような「鬼道」が興隆した背景に、そうした社会の混乱状況を想定するのが自然である。しかし考古資料からみれば、2世紀後半は社会基盤の成熟期ととらえられるのである。五斗米道の発展の基盤として、こうした社会的側面も考慮する必要がある。

**四川の図像世界と信仰** 後漢四川の地域的特色として本研究において注目したのは、図像である。他地域には例のない図像や表現方法が認められることに加え、異なる器物や装飾の間で共通した表現方式が採用され、それらが地域的なまとまりをもつ。銅鏡など各種の器物や墓葬装飾において特色ある図像が共通する。図像表現に関して地域の「様式」が形成されていたことがうかがわれる。

そうした図像様式は西王母など崇拜対象に関わるものが中心であり、この地域において信仰と図像表現が密接に結びついていたことがわかる。佛像表現が比較的早い段階から登場するのも、信仰対象を図像として直接に表現する風習の存在が大きいものと考えられる。

銅鏡や石造物など考古資料として残された器物以外にも、紙や布帛、壁画などにも共通の図像が施されていたはずである。とくに建造物の壁画は重要である。墳墓の画像にその一端が残されているわけであるが、廟や祠堂など幅広い階層のひとびとの目にしやす

いところに、共通した表現形式の図像が多数あったことを想像すべきだろう。この地域において、図像が様式を形成した基盤として、信仰と図像の深いむすびつきを生む施設や風習などの基盤があったものとみたい。

## (2) 五斗米道の展開

**華西系鏡群の北遷** 2世紀後葉に華西系鏡群の中心は陝西に移動した。五斗米道の北遷と同時期の動きであることから、教団と関係をもち、活動を共有した製作工房の存在を推定した。

漢中地域や四川の北部において、この移行期の華西系鏡群の出土が少数ながら確認される。漢中からは揺銭樹も出土しており、四川の影響が及んでいたことは確かである(羅二虎 1982「陝西城固出土的錢樹佛像及其与四川地区的關係」『考古與文物』2期)。後漢時代の漢中地域は、揺銭樹という四川の風習を受容しながらも、「自地域にあった形に変容させ」ていることが特色であり、こうしたあり方から「小文化センター」という評価もある(小澤 1998「揺銭樹からみた四川省と漢中・安康地区」『中国南北朝時代における小文化センターの研究』漢中・安康地区調査報告)。考古資料から五斗米道が占拠していた時期の漢中地域の特色をとらえるのは、現状では資料的に無理な状況であり、今後の課題としておきたい。

**江南・徐州への展開** 江南における画紋帯対置式神獸鏡の成立は、こうした華西系鏡群の移行期のことである。それは鏡群の中心となる生産の移動のみならず、他地域への展開をとまなうものであった。

江南に展開した画紋帯対置式神獸鏡は、三段式神仙鏡との共通要素が多く、工人の直接の移動を想定できる。「九子」「三王」に関する信仰的な側面は欠落してしまうのであるが、黄帝・玄女を継承し、そうした信仰に関わる図像を保持してゆく。

一方徐州地域には、画紋帯同向式神獸鏡や一部の画紋帯環状乳神獸鏡など、廣漢系鏡群の図像と融合し、やや改変された形式として影響を及ぼした。同向式や伯牙・黄帝像、龍虎座をとまなう西王母・東王父表現など、図像や配置法が傳播したのはまちがいないが、変容した点も多い。徐州地域には在来の銅鏡生産(淮派)が存在したので、間接的な影響にであったのかもしれない。

2世紀後葉、この徐州の地域への展開期には、廣漢系の銅鏡生産は衰退し始めていたようである。徐州系鏡群に華西系と廣漢系の図像表現が融合して導入されている点からみると、廣漢系鏡群の製作者が華西系や徐州系の製作者集団に吸収された可能性も考えられる。

**各地の信仰との関係** 華西系鏡群が五斗米道と深くかかわるといふ仮説が成り立つなら、上記のような他地域との関係も、信仰

上の影響関係や傳播とつながる可能性が高い。文献には語られていない地域間の交流について、考古資料から明らかにできる可能性をもつ。江南の画紋帯対置式神獸鏡に表された黄帝・玄女の信仰が、道教へと継承されてゆく点を考慮すると、通説よりも早く南方地域に信仰の影響が及んでいた可能性も浮上する。

**太平道との関係** 本研究において新たに浮かび上がった課題は、五斗米道と太平道との関係である。文献には教法が同じという以外に、直接の関係性は触れていない。しかし同時期に発生した、よく似た信仰をもつ集団同士に何らかのつながりがあったことを想定するのは自然である。多くの研究者によって言及されてきた問題である。

山東西南部と四川の間では、図像や銅鏡生産の密接な交流が確認された。孝子傳、各種故事図像などの共通性からは、思想・信仰の面における幅広い影響関係であったと想定できる。中間地域を飛び越えたつながりであることも注意される。地域間の文化や風習の交流関係を基盤として、信仰集団の間にも関係性が成立した可能性を示す。五斗米道と太平道との連動性という古くからの問題に、新たな視点を与える材料となる。

### (3) 信仰内容

**北辰・北斗・斗母** 三段式神仙鏡の図像分析から、五斗米道に北辰・北斗とその聖なる母である斗母への信仰が五斗米道にあった可能性を考えた。

道教經典には、五斗米道と北斗信仰との関わりを直接に示すものがある。『道藏』洞神部にふくまれる北斗延生經ほか五斗經には、老君が張陵に伝授したとの記述をとまなう。もちろん後世の仮託ではあるのだが、五斗米道での北辰・北斗の星辰信仰が傳承として残されていた可能性を考える。台湾の道教寺院例を紹介したように、斗母や北斗・北辰の神格を張陵と並べる風習は現在まで継承される。卿希泰は、「五斗米道」の名称自体が、五方星斗崇拜と関連あるもののみた。「斗米」を「斗姆」であり、また『漢天師世家』で張陵の母が、「神人が北斗魁星中から降臨した夢をみて、感応して妊娠した」との伝説にも着目する(卿希泰 1980『中国道教思想史綱』漢魏兩晉南北朝時期)。

ただし、斗母・北辰・北斗信仰と銅鏡との関わりは固定的なものではなかった。華西系鏡群の北遷とともに上段の図像は急速に退化する。九子の区別はなくなり、銘文でも「九子」は単なる吉祥句と化す。江南の画紋帯対置式神獸鏡にも銘としては継承されるが、図像とは乖離する。出現当初は信仰と深く結びついていた図像や表現が、銅鏡の製作者集団と信仰集団との関係などにより、形骸化していったものであろうか。

一方、北斗信仰に関して注目しておきたい

のは、後漢代のこの時期に長安周辺で隆盛した鎮墓瓶との関係である。それには北斗の図柄や銘が多数記されている。長安周辺の墓葬でこうした鎮墓瓶の使用がおこなわれている時期に、華西系鏡群も大量に出土するようになる。鎮墓瓶のそれは「北斗主死」であり、三段式神仙鏡の図像に想定した北斗信仰とは性格の異なるものであるが、両者が関連する可能性も考えておきたい。

なお五斗米道の信仰対象として問題となるのは老子の問題である。後漢代に老子の神格化が進んだことは各種の文献から確かめられているが、ここで取り上げた考古資料においては、老子が信仰対象として図像化された形跡は認められない。山東地域の画像石と比べて、むしろ老子像表現自体が少ないのが特徴である。考古資料からはこの問題を探る手がかりは得られていない。

**各種の神格** 四川の鏡群においては上記の斗母・北辰・北斗以外にも、特有の神格が採用された。黄帝、玄女、伯牙である。また神仙ではないものの崇拜対象として、堯舜・蒼頡・燧人などの図像も用いられた。西王母と東王父を合い並べて表現する方法も定着した。

斗母・北辰・北斗、黄帝・玄女など四川で図像化された神格は、道教の崇拜対象として継承された。一方、伯牙のように銅鏡図像としては流行し、魏晋期にも一部の地域で継承されるが、その後は顕著な存在が確認できない神格もある。

こうした多様な崇拜対象が組合せられて表現されるのも、華西系鏡群を中心とした四川の図像文化や信仰の大きな特色と考える。多様な神格が包容される道教的性格の萌芽とみることもできる。

**呪法** 蒼頡や黄帝・玄女の像から、符を用いた信仰とのつながりを推定した。五斗米道や太平道においては水や符を用いた呪法が重要な役割を果たしていた。銘文にも登場する「除凶」は、後漢後半において一般層にとくに必要とされた役割であった。

**道教への系譜** 後世の道教經典に登場する神格と漢代の四川の図像との結びつきを明らかにできたのは本研究の収穫の一つである。3世紀前葉の魏への降伏後、五斗米道信者は關中地域や鄴などに移住させられたが、それらは天師道の信仰の拡散をもたらしたものと想定されている。2世紀後葉における華西系鏡群の他地域への強い影響力を認めるなら、それ以前から他地域への信仰の浸透が始まっていた可能性を示すことができる。

五斗米道・太平道と、道教との歴史的つながりを検討するという研究目的の端緒はつかむことができた。

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

研究者番号：

〔雑誌論文〕(計 3 件)

森下章司 2016(予定 2015 年 11 月受理)  
「神獸鏡と黄帝・玄女」『古文化談叢』第 76 集

森下章司 2015 「漢代の説話画」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 194 集、国立歴史民俗博物館、187-200 頁

森下章司 2012 「華西系鏡群と五斗米道」『東方学報』京都第 87 冊、京都大学人文科学研究所、43-79 頁

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

森下章司・黄曉芬 2016 『平成 24～27 年度科学研究費助成事業 基盤研究(B)研究成果報告書 五斗米道の成立・展開・信仰内容の考古学的研究』

〔産業財産権〕

出願状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
出願年月日：  
国内外の別：

取得状況(計 件)

名称：  
発明者：  
権利者：  
種類：  
番号：  
取得年月日：  
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森下章司 (Morishita shoji)  
大手前大学総合文化学部教授  
研究者番号：00210162

(2) 研究分担者

黄 曉芬 (Huang Xiaofen)  
東亜大学人間科学部教授  
研究者番号：20330722

(3) 連携研究者

( )